

「岡崎の歴史と文化～明治・大正・昭和～」

愛知学泉大学

教授 岡田洋司



はじめに

岡田でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。先ほど司会の方からお話がありましたように、かれこれ20年前になりましたが、『岡崎市史』というのがございまして、それに係わらせていただきました。こうした自治体を作るいわゆる自治体史の中でも非常に大規模なもので、全部で20巻、そのうちの近代（明治から昭和戦前期）の部分を担当させていただきました。そのとき考えたことがいくつか、まだ解決できない宿題として残っておりまして、まあぼつぼつと岡崎のことも勉強させていただいているという状況です。

今日は、「岡崎の歴史と文化～明治・大正・昭和～」というやや漠然としたテーマですが、以前、NHKの朝の連続小説「純情きらり」が話題になったときも、そういう話をさせていただく機会がありましたので、今日は少し“文化”という方面に絞ってお話し申し上げようと思っています。簡単にいうと岡崎、もう少し一般化しますと失礼な言い方かもしれませんが、「地方の中小都市」、そういった所にどういった文化的な可能性があるのかということをお話しようかと思っております。

1. 近代の岡崎を見る視点

尾崎士郎『人生劇場』と岡崎

私が近代の岡崎のことを考えるときには、二つの文章がいつも頭に浮かびます。一つは尾崎士郎さんの小説『人生劇場 青春編』です。それからもう一つは、新美南吉さんの「昭和十四年ノート」の一部です。

まず、どういう意味で、この文章が岡崎を考える場合非常に興味あるかということですが、まず『人生劇場 青春編』の方から説明いたします。これは昔、私の大学生の時代ですからかれこれ40年ほど前には随分読まれた本です。新潮文庫で4冊になっておりましてかなり長いのですが、青春編という名前ありますからとくに若い人に随分読まれたと思います。ツタの絡まるチャペルなどは出てこない、ちょっと“小汚い”青春文学ですが…。ところがこれは、近年は新潮文庫からも落ちておりまして、今読もうと思うと『尾崎士郎全集』しかないという状態です。やはり時代が変わったのでしょうか。多分ここにおいでの方は比較的年配の方が多いので、少なくとも名前ぐらいはご存知かなと思いますが、いかがでしょうか。

主人公は青成瓢吉あおなりひょうきちという青年です。要するに“青成り瓢筆”ひょうたんですが、尾崎さん自身がモデルか、あるいは分身です。この主人公はもともと吉良横須賀の出身なのですが、地元の小学校を出て、県立第二中学、今の岡崎高校に入ります。明治の終わりという時

代としては、大変、恵まれた立場です。そして岡崎で学校生活をおくります。さらに卒業後は、岡崎を出て東京に行く。早稲田に入るためです。

今日、資料として配布しました文章というのは、その主人公が東京に出て行くシーンです。場所は岡崎駅です。ちょっと長めですけれども読んでみます。「おい、ずいぶんさがしたぜ」「やあー」。つまり友達が来たわけです、見送りに。「瓢吉がどきとしてふりかえると紺^{こん}紺^{がすり}の筒袖を着て、卒業したあとでもまだ昔のとおりの中学生の制帽をかぶっている」二木という同級生です。実は彼には、モデルがあります。またあとでお話をしますが大須賀健治という人物です。「良く来てくれたね。」「うん、今朝、君の手紙を見たんだよ。苦学をするんだってー」。苦学という言い方は当時かなり一般的でした。簡単に言えば親の仕送りがなくて、一人で自活して学生生活を送るというのが、苦学です。「僕はあれをよむとすぐに君に会いたくなってね、昼頃から来て今まで岡崎で遊んでいたんだ」。この友達というのは藤川村に住んでいるので、岡崎の街中で時間をつぶしていたということです。「それで、君、学校はきまったのかい。何もかも行ってからのことだ」。今の若い人はこんなことはやりそうもないですが、昔はこういうこともあったらしいですね。

憂うるなかれ友よ、という感激をこめて、瓢吉は二木の顔を見たのである。遠くから彼の乗るべき汽車の灯が見え、轢^{れき}音が夜空に高まってきた。〔中略〕長くしゃべっているひまはなかった。汽車が着くと瓢吉は、どよめきかえす人波を押しわけ、まっさきに三等車の乗車台にとび乗った。

この文章をここで読むことで何が言いたいかということですが、要は岡崎、もう少し一般化すると地方の中小都市ですが、地域、岡崎の場合で言うと西三河の“中心”であるということです。主人公は出身地の横須賀村には、中学校はなかったのが岡崎に出てきたわけです。当時はやっとなら高等小学校が三河全体に普及しはじめたという時期です。尋常小学校6年を終えると、その中の比較的恵まれた人が高等小学校に行くという時代です。戦前の中学校といえば、今の高校にあたるわけですが、当時は村で中学に進むのは学年で一人か二人です。そもそも村の中に中学校はありません。だから彼は岡崎に出てきたわけです。それはもちろん彼だけでない。初期の頃の第二中学校の卒業生名簿等を見てみますと、西三河全域からあるいは奥三河から第二中学校にきています。その意味でも岡崎というのは西三河の中心です。そしてそこにすれば、色々な可能性が開けるわけです。つまり学校教育で言えば第二中学校があった。あるいは師範学校があった。それから今の北高の前身の岡崎高等女学校です。「純情きりり」の主人公の母校です。少なくとも岡崎では中等教育で自分の可能性を花開かせることができるわけです。もちろんそれは学校教育だけではなくて、生活にしても同様で、岡崎にすれば、映画等々当時の新しい娯楽やファッションがあるわけです。ですからそういった西三河一帯から人びとを集める。あるいは西三河一帯の中心であるという、そういう位置に岡崎はあります。これが前提です。

通過点としての岡崎

問題はその先です。中等学校で自分の教育を終える人は岡崎で充分です。つまり今言ったような三つ学校や工業学校・商業学校があります。これは当時としては相当な学歴です。ただそれより上の学歴と言いますか、それよりもっと勉強したかったらどうなるか。とすれば岡崎では間に合いません。具体的に言うと名古屋の第八高等学校に行くか、いきなり東京・京都に出してしまうかというコースになります。つまり岡崎というのはある種の可能性はあるけれども、それ以上の可能性は東京に行かないとないという、そういう中間的な町なのです。つまり中心であるが、通過点でもあります。これは、近代日本の中央集権的な国づくりの一つの結果でもありますが、岡崎だけの事情ではありません。日本全国の中小都市、もっと言えば、東京意外は多かれ少なかれそうした性格を持っています。

そこでちょっと岡崎の全国的な位置を少し確かめてみましょう。これも色々な統計資料を持ってきて良かったのですが、あえて文章を持ってまいりました。これは1916年(大正5)7月の『^{しみん}斯民』という雑誌、これは実は昔内務省というお役所がありまして、そのお役所の外郭団体(という言い方は正確ではないのですが)が出してありました行政関係の雑誌にのった文章です。ご承知と思いますが、岡崎は、この大正5年7月に市制を施行しました。この文章のタイトルも「新たに市になれる岡崎の現在と将来」。そのときに内務省の人たちが岡崎どのように評価していたのかという、そういう文章です。「岡崎は愛知県額田郡に属し、岡崎駅より一里の軽便鉄道...」。まだ軽便鉄道だったのです。「岡崎駅より一里の軽便鉄道で東海道線と連結せられ、現在戸数七千六百八十七。人口三万四千八百九十五」。現在約10分の1の戸数・人口です。それが全国的に見てどのくらいの位置にあるかということですが、この文章は、こう続けています。

今、これを大正四年度予算に拠る、高田、四日市、福島、尾道、丸亀の人口に比するにこれを凌駕して居る。又其の予算も拾五万三千円で、右に上げた各市の予算よりも更に大きい、即ち人口、戸数、予算いずれも市としての実力を有して居ると謂い得る。一体に日露戦争後には市は一時に増加した。明治三十九年には長岡、宇治山田、豊橋の三市。四十年には横須賀、松本、福島の三市、四十四年には高田、浜松、大分の三市、大正三年には旭川区、若松市の一区一市、本年四月には尼崎市が新たに置かれたという趨勢である。

色々な地名があがっていますが、多分ここにあがっている地名は皆様方全部ご存知だと思います。つまり逆に言えば、岡崎はこれらの都市に並ぶ、あるいはそれ以上と評価されているので、全国的な知名度をもっている都市と言えます。

近代日本で、一番最初に市ができましたのは1880年(明治23)のことです。この年に“市”あるいは“町村”が近代的な自治制度の下で認められて、その時に39の市が誕生しました。簡単に言うと大体県庁所在地です。愛知県で言えば名古屋です。あるい

は近県で言いますと岐阜です。あるいは静岡です。そうした県庁所在地を中心に 1880 年に日本で最初に市が誕生したのです。そして、二廻り目で誕生したのがここに書いてあるような市です。ですから岡崎も一番大きな都市のグループではないのですが、その次辺りの都市グループに属すると位置づけてよいかと思えます。とにかく愛知県で三つ目、全国で 67 番目の市です。

資料にあります「愛知県の人口上位 20 市町村」という表を見てください。『愛知県統計書の数字をもとに作ったものです。これは 1921 年（大正 10）の数字でちょっと後になります。これを見ますと結構おもしろいですね。まず岡崎というのは人口約 4 万 2000 ですね。名古屋・豊橋について 3 番目ということになりますね。現在は、愛知県では、「平成の大合併」の結果、豊田市が本当に広大な市になってしまったので、人口は豊田市の方が多くなっています。なにしろ豊田市は、足助・稲武はもとより長野の県境までが市域に入りましたから。岡崎も額田町や下山町まで市域となって相当に広いのですけれども。この辺は昔の感覚とはだいぶ違っています。

ついでに言えば、西三河の場合、少し意外かもしれませんが、岡崎の次は安城（当時は安城町）です。これ見ると名古屋・豊橋・岡崎・一宮・瀬戸、その次が安城なのですね。農村部ですからずっと小さいのかなと思っていましたけれども、実は大正 10 年の段階でもう人口 2 万、全県的には 6 番目ですね。この少しあとから言われるようになった「日本デンマーク」の中心都市であったということでしょうか。安城のことはさておき、要するに岡崎は大体このぐらいの地位です。

とにかく結論としては岡崎というのは“地方中都市”である。あるいは全国でも代表的な中都市である。そして色々な可能性は持っている。しかし、一番最初の文章に戻ると、普通の意味では東京や名古屋にはやはりかなわないという、そういう位置にあります。では果たして岡崎、一般化して地方の中小都市の文化を考える場合、はたしてその内容が東京や名古屋より劣るのか、劣るといはいやな言い方ですけれども、ちょっとそれを考えてみます。

2. 岡崎の文化的可能性

岡崎出身の文化人たち

明治維新から現在にいたるまで岡崎出身の“文化人”というのは結構たくさんいます。唐突ですが、今、あるビール会社の缶ビールをもっています。ちょっとご覧いただけますか。問題はこの上についている商標です。これ“麒麟”^{きりん}ですね。そういうとメーカーが分かっけてしましますが、と言っても動物園にいるあのキリンじゃないのです。これは中国の想像上の動物です。この麒麟の商標、実は大正時代のある有名な画家がデザインしたものです。山本^{かね}鼎という画家です。どんな人かと言いますと、岡崎生まれで東京に出て、さらにフランスに留学した人です。最初は一途に芸術としての絵画を追っかけていました。フランスに行きまして、フランスの農村で色々なスケッチ等々をし

ていたのです。そのうちに、実は、いわゆる芸術家だけじゃなくて、一般庶民もちゃんと絵も描くし、それを虚心に見ると美をそなえていることに気がつくわけです。そこで日本に帰りまして、長野県の農村で農民画運動という芸術運動を進めました。戦前の農民は貧しい人が多くて、あまり文化などというものに縁がないと見られていたのですけれども、そうではなくて、農民の子供たちが素晴らしい絵を描くということに気がついて、この運動を起こし、推進したのです。もちろん同時に自分の画も描いています。今持っていますのは、長野県上田市の上田博物館で行われました「山本鼎生誕 110 年展」という展覧会のカタログです。こうした展覧会が岡崎でひらかれたかどうか、あまり記憶にないのですけれども、ようするに岡崎以外の方が有名な人だと思います。

文化人は他にも大勢います。岡崎と繋がりがある人もいますけれども、繋がりがほとんどない人もいます。例えば本多光太郎。矢作町の出身です。いわゆる KS 鋼の発明者です。日本で最初の文化勲章の受章者ということになりますね。それから志賀重昂^{しげたか}。こちらは、かなり岡崎と繋がりを持っています。日本で最初に地理学というものを確立して、全世界中歩き回って各地の風景を見てきました。『日本風景論』という本がありまして、これは岩波文庫等でも今でも比較的簡単に手に入ります。相当有名な人ですね。高校の教科書にも出てきます。

岡崎東公園に銅像があります。また、お墓も東公園内にあります。このお墓は、彼のいわば日本だけに収まらない個性を象徴するようなそういうようなお墓ですね。インド様式のお墓ということです。彼の場合は東京での活動が基本ですが、岡崎から選挙に出たりもしています。岡崎にはあちこちに彼の揮毫がありますね。

中小都市の文化

他にも岡崎出身の文化人は色々います。ただし、志賀のように岡崎との接点をもっている人は少なく、ほとんどの人は、結局は岡崎ではなくて、東京等で文化的な活動に携わりました。多分これが、岡崎だけではなく一般的なのです。つまり自分の生まれ故郷では文化的な活動ができなくて、というか活動できる可能性が小さく、東京へ出て行って活動をするということです。逆に言えば中小都市というのは文化的な可能性はあまりないと見なされているのが普通でしょう。では本当にそうなのかということです。

文化というのは、一般論でいうとお金が嵩むものです。例えばオーケストラ一つ維持しようと思うと大変なお金が必要です。オーケストラは入場料だけでは、支出をまかなえませんから。東京や大阪はオーケストラを持っている。名古屋も厳しいですが持っている。では、岡崎でプロオーケストラを維持できるか、かなり難しいと思います。

何が言いたいかというと、私たちは、大都市文化というものをどうしても文化のモデルとして考えてしまいます。今、例にあげたオーケストラはそれです。そうした大都市のもつ文化と同じ土俵の中で勝負すれば、やはり東京や名古屋が勝つでしょう。文化に勝ち負けは変ですけれども。ということは、地方都市・地方中小都市は、大都市 = 東京をモデルに同じことをしようとしても、大都市文化の貧相な二番煎じになってしまうの

ではないかと思います。

大正時代に“文化主義”というのがありまして、色々な人が文化主義というものを唱えたのですが、その代表に桑木^{げんよく}巖翼という哲学者がおります。そして、こういうことを言っているんです。ちょっと表現は違うかも知れませんが、文化というのは、要するに自分の個性を生かし、自分の可能性を發揮させることだと。自分の個性を生かし、自分の可能性を發揮させるのは、それは一部の芸術家だけの問題ではありません。その意味では、やや飛躍した言い方かもしれませんが、私たち自身も文化の担い手となりうるのです。だからその意味で言えば、N響のような立派なオーケストラだけが文化ではないし、偉い画家の絵だけが文化ではないのだと思います。また、新しいものだけが文化ではありません。ですからその辺を考えていくとやはり地方で生きている人間として文化の持ち方というのは東京と違うのだらうという気がします。逆に、またそうした大都市の多分に商業主義的な文化のあり方で、地方文化を計っても不毛だし、大都市の驕りだと思えます。

3. 近代岡崎の文化

新美南吉の康生町散策

では、何が地方都市の文化なのか、あるいは具体的に何が岡崎の文化なのか、考えてみましょう。そこで次に見ていただくのは、先ほどの尾崎士郎さんの文章の次にある新美南吉さんの文章です。新美南吉、もちろんご存知ですね。「ごんぎつね」「おじいさんのランプ」とか、いわゆる童話、最近では児童文学という名前を使いますが、その作家として有名です。「東の賢治（宮沢）西の南吉」という言い方がされるそうです。といっても有名になったのは戦後です。簡単に経歴を書いておきましたが、1913年（大正2）の生まれ、43年（昭和18）戦争中に亡くなっています。まだ30ですね。結核です。半田の生まれで今の東京外国語大学を出まして、今の安城高校、当時の県立安城高等女学校の国語・英語の教員になります。校務のかたわら色々創作活動をしたわけです。

今日、資料としてお目にかけるのは、1939年（昭和14）1月28日のノート＝日記です。今も昔も小中高の先生方は非常に忙しくて、実は当節、大学も忙しいのですけれども、色々研修等があります。当時は岡崎に師範学校があり、そこで研修等が行われたようです。南吉もこの日、師範学校で研修をやったわけです。

その帰り、僕は6時40分の汽車で帰るからと言って別れその辺りを散歩した。生徒の作文に出てくるみどりやという店があったので入って見たら玩具や、文房具などが沢山あった。そのほとりで飯をたべ、資生堂といふ喫茶店があった筈だがと思いつながら、古本屋をのぞいているうち、安西冬衛の“軍艦茉莉”とマーテルリンク^{まり}評伝があったので50銭で買った。

問題は、その後です。

この辺りは落ち着きのある華かさで私を充分ひきつけた。新しいものと古いものが

入り交じっていながら少しもちぐはぐな感じを与えなかった。しっとりと良く溶け合っていた。東京にも大阪にも見られないいい雰囲気は伝統の匂ひをたゞよわせていた。

この辺が地方の文化、少なくとも岡崎の文化を考える場合に大きなヒントになることだと思います。

岡崎の“進取性”

岡崎というのは新旧の要素が不思議に調和している街だと思っています。先ほどの新美南吉の文章の中に安西冬衛『軍艦茉莉』とか、マーテルリンクの『評伝』というのが出てきました。これら当時の最前衛の本です。例えば『軍艦茉莉』。これは日本の前衛詩の代表のような詩集です。マーテルリンク、普通、マーテルリンクと言っているかもしれませんが。児童文学『青い鳥』の作者ですが、実は彼は児童文学専門ではなくて、当時のヨーロッパの最新でかつ難解な象徴主義文学というものを書いていた人です。そういうものが古本屋にある。古本屋にあるということはそれを売ってしまったということかもしれませんけれども。

実は、岡崎には、近代的な文化や思想がある程度根づいていました。ちょっと例として適当かどうかわかりませんが、大須賀健治さんという方。実は先ほどの『人生劇場』の中に出てきた主人公を見送りにきた「二木」です。本名は大須賀健治です。藤川村の裕福な木綿問屋の息子さんなのです。叔母に大須賀里子という人がおりまして、この人は、かなり有名な社会主義者です。社会主義というのは、今では何の価値もないように思われていますが、少なくとも明治の社会主義者というのは、要するに世の中の悪に対してそれを直そうという非常に正義感に燃えていた人びとです。そしてこの大須賀里子はそうした初期社会主義者で、有名な社会主義者山川均の最初の奥さんです。山川均の奥さんといえば、山川菊枝ですが、これは再婚です。大須賀健治は、叔母さんからの影響がありまして少しずつ社会主義というものに目覚めて、結局、尾崎士郎の後をおって東京に出て行くのです。そこでさまざまな活動を行って岡崎に帰ってきて『三河新聞』という新聞の論説員になります。それから『三河平野』という小説を書きます。これは手に入れにくいのですけれども、今でも読むことができます。福岡寿一さんという方がこれを編纂して、岡崎タイムズ社から出しました。1970年（昭和45）のことです。

それから近藤孝太郎という人がいます。「純情きらり」の中で、ひょっとしたらこの人がモデルかなという人も出てきましたが、岡崎で文化的な一種のサロンをやった人です。米河内村^{よなごうち}の資産家の生まれで、洋画家になりたかったのです。ところが父親は画家になんかなるもんじゃないと。よくある話です。そこで東京高等商業学校、今の一橋大学に行き、日本郵船に就職します。でもやっぱりどうしても絵の勉強をしたいという気持ちがおさえきれなくて、フランスに留学します。そうして岡崎に帰って、岡崎高女で絵の先生をやっていました。そのかたわら新しい美術・芸術の普及に努めたのですね。

たとえば岡崎美術展という絵画展をはじめます。それから新劇を岡崎に持ち込んだりもしています。

このように近代の岡崎は、当時の先進的な文化がある程度根づいていました。また、社会主義といういわば異端の思想をまったく頭から排除しないある種の懐の深さ、それがあったという感じがします。

岡崎の伝統性

他方、新美南吉は岡崎のいわば古い側面にも触れています。それはある意味では言うまでもないことかもしれませんね。

江戸時代の岡崎というのは相当な賑わった町です。尾張と三河と比較してみましょう。そうすると江戸時代の尾張・三河というのは決定的に違います。何が違うかと言いますと、尾張というのは、尾張藩という大藩があって、あとは、その尾張藩の家老の成瀬隼人^{はやとの}正^{しょう}の藩しかないという状態でした。ということは、城下町というのが大きな名古屋と小さな犬山しかなかったということです。それに対して三河はどうかというと、中小の藩がいっぱいあったわけです。岡崎・刈谷・西尾・田原・吉田等々。西大平藩という藩もあります。西大平藩もちろんご存知ですね。東名岡崎インターから出たところ、大平町ですね。その町内に一つの藩があったわけです。一万石です。その殿様、誰だかご存知ですね。あの岡越前守です。岡越前守が江戸町奉行・寺社奉行を辞めてから最後に大名に取り立てられたのです。この小さな西大平藩等は別としてあと岡崎藩とか西尾藩等々というのはみんな城下町を持っています。そしてそうしたいくつかの城下町が、それぞれ個性的な城下町文化を競い合っているという状況が生まれたわけです。

岡崎の場合ですが、例えば俳句です。鶴田卓池^{たくち}という人がいました。この人は全国的な存在なのですが、この人を中心として色々なグループがありました。それから茶道です。岡崎の場合“宗偏流”^{そうへん}という流派が多いですね。茶道があれば和菓子があります。これもりっぱな文化です。逆に言うと和菓子があるという所は茶道が盛んであったということでもあります。ついでにいえば和菓子や茶道があるということは、それ以外にもさまざまな文化がありました。そして、今でもおいしい和菓子が沢山ある所、例えば金沢、もちろん東京もそうですよね。名古屋も結構あります。それから松江だとか。そういう所はやはり江戸時代の文化が盛んであったということが出来ます。逆に言えば和菓子がない所というのは少なくとも伝統的な文化はあまり盛んではなかったのだらうという、偏見かも知れませんがそういう気持ちを持っています。

少々脱線気味ですが、言いたいのは岡崎にはそうした文化があったということです。そしてそれは、近代になっても受け継がれています。たとえば俳句。荒川道楽さんという相当有名な方がおられました。それから日本画ですね。それから邦楽茶道、こうしたものが多分少なくとも戦前、昭和前期までは、相当脈々とあった筈です。今でもありません。もちろん中には古くさいと思われる方もあるかもしれませんが、これやはり相当大きな文化、文化的な水脈だと思います。

新旧のハイブリット文化

先ほどの新美南吉の文章、康生の良さを言うのに、新しさと古さが調和しているということをおげています。古い文化があるということは、少なくとも文化的な流れが、岡崎にあるということです。文化は一日にしてはなりません。文化を一日にしてならせようと思えば、莫大なお金をつぎ込んで買うしかありません。それで本当に根づくのか…。逆に新しさもあるということ、それは伝統に安住していないということです。私は、岡崎のそうした新旧の二面性に注目したいと思っています。そこで、こんな名前つけてみたのです。「新旧のハイブリット文化」。新しい文化と古い文化が混じっているような文化です。そして、それが近代の岡崎にいくつもあると思うのです。例えば1911年（明治44）に創刊された雑誌『鞆』。鞆、何のことかおわかりですか。これ、「ぶらんこ」と読みます。“ぶらんこ”のことです。これ常識的に言うとちょっと妙な雑誌です。この雑誌は、二つのグループが編集しています。一つのグループというのは岡崎の俳人です。先ほど言いましたように、岡崎は俳句が江戸時代から盛んで、それが明治にも大正にも受け継がれている。その中に正岡子規の門下の岡田撫琴さんという人がいます。この岡田撫琴さんという人を中心にして俳句をやっている人が片方に集まります。もう一つのグループは、安城の若いお坊さんたちです。安藤現慶・京極徳含・京極徳順・亀山孝淳というような、みんな安城のお寺の跡取りです。俳句やっている人とお坊さんが集まってどんな雑誌なんだ。何か抹茶臭そうな古くさそうな雑誌かな、と見るとそうではありません。撫琴さんは、この雑誌の「発刊の辞」でこう書いています。

思ふに今の時代は思想の過渡期であって僕等は「このまゝでは物足らぬ、じっとしてはられない、何事がせねばならぬ」とせめ立てられる心地がする。

この雑誌が創刊された日露戦争後は新旧文化の入れ替わり時期です。その中で本来だったら古い事をやっていけば良かった、俳句をやっている人、あるいはお坊さん達が、新しい思想を勉強して、それを自分のものにして論説だとか小説だとかを書いて、それを発表したのがこの雑誌です。この雑誌全体を見ると新しい意識と古い意識が混じっていますが、その二つの意識の交わりの中から一つの文化を創り上げようという、そういういわば気概が伝わってきます。

こうした新旧の混じった文化は他にもあります。例えば柴田顕正さん。本当は「あきまさ」と読むらしいですが、「けんせい」とふつう読んでいます。岡崎中学校の先生から岡崎の図書館長になった人です。この人の業績ですが、戦前の『岡崎市史』をほぼ一人で作りあげた。それだけではなくて、三冊本ですが、『徳川家康と其の周囲』という別巻を書きあげた。『徳川家康』という大河小説がありますね。山岡荘八さんの。あれ凄く詳しいですね。普通、私たちは山岡さんはよくもここまで詳しく調べたなと思うわけですが。ところがこの小説は、柴田顕正さんの『徳川家康と其の周囲』を参考にしているのです。別にこれは山岡さんを批判するために言うわけではありません。本当に詳しく柴田さんがそれを調べて、三冊の本にまとめているのです。「温故知新」と言います

けれども、古い物を調べて、それを当時としては新しい歴史学の手法で描きあげた、やはり新旧の両文化のハイブリッドだと思います。こういうことが、近代の岡崎文化にはたくさんあるわけです。

おわりに

最後に、岡崎を含む地方の都市の文化のあり方を少しだけお話して、まとめとします。最初の方に申し上げたことですが、地方の中小都市の文化は東京等の大都市と同じ土俵のものではないだろうし、一緒である必要もないだろうと思います。もちろん別と同じ土俵であってもかまわないですが。大都市の文化は、たしかに素晴らしいものが多い。だけでも全く同じことを岡崎でやろうと思っても、大抵は東京よりスケールの小さいものしかできないですね。大都市の文化は、あくまでも文化の一つの形であり、それが文化のすべてではありません。やはり中小都市には、逆に中小都市しかできない文化というものがあると思います。

三つほどそうした文化を作る場合のヒントを出しておきます。一つは地域性ですね。つまり岡崎に即した、西三河に即した、愛知県に即した形の文化はできないだろうかということです。それは、その土地に根づいた歴史や伝統を大切にすると、あるいは逆にそれらと対峙するところから生まれます。二つ目は、非商業性ですね。つまり、必ずしも商品となるとは限らないということです。先ほどの『鞆』にしても、そんなに売れたわけではありません。撫琴さんたちの持ち出しが多かったはずですが、お金を持ち出しても彼らは、言いたいこと、書きたいことがあったのです。文化が結果としてお金になるのは決して悪いことだと思いません。しかし、お金を目当てに文化を作ろうとするとどうも何か違うのではないかなという感じがします。

それから三つ目。二つ目ともかわり、ここが私一番重要だと思いますが、文化というものはどこか高いところにまつりあげておくものではないと思います。例えば偉い人が書いた文学、天才が書いた絵とか、それはもちろん素晴らしい文化です。それを私たちは、受容したらいいのです。だけど私たち自身も文化の担い手となることができます。先ほど言ったように文化というのは人の生き方が基本です。自分の個性を発揮することです。とすれば私たち自身も文化を作ることができるはずだという気がします。

一つ例を出します。「岡崎アーカイブセンター」という NPO の活動です。これをしていらっしゃるのは木村^{よしや}剛也さんという方です。ご本人が今、目の真ん前におられるので、お話しにくいのですが…。具体的には岡崎を地図や写真でタイム・トリップする、「デジタル城下町製作プロジェクト」ということをやっていらっしゃいます。先ほど岡崎は古いものを大切にしていると言ったのですが、現実には今、どんどん古い写真がなくなっています。実は岡崎市史のときも随分苦労しましたが、建物等の現物もなくなっています。古い写真もどんどんなくなっています。だからそういったものを集めてそれをデジタル化する。データ化する。それによってひとつの文化財になるのじゃないか

ということを考えて、こういうNPOを立ち上げ、活動していらっしゃいます。一面から言えば、本来どこの家にもあるようなもの、つまり庶民が作ってきた文化財、それを集大成しようということですね。そうした古いものと、デジタル・データ化という新しい要素の結合。先ほど私が申しました新旧のハイブリット文化にほかならないわけです。こうしたことは、おそらく他にも色々できると思います。木村さんの活動はひとつの例ですが、とにかく、文化というものをさまざまな形で私たち自身が立ち上げることができるのではないか。そして岡崎にはそうした可能性というのが色々あるのではないかというのが今日の私の結論です。どうもご静聴ありがとうございました。